

【特別寄稿】

日本語入力とショートカットキー ーなぜ“便利な機能”と解釈されるのかー

Interpretation of PC shortcut keys in Japan

長澤直子

NAGASAWA, Naoko

キーワード: キーボード; ショートカットキー; ローマ字入力; タイピング

Received: 2021. 3. 15

1. はじめに

ショートカットキーとは、PCでのアプリケーションソフトを利用する際に、各種機能を実行するために使われるキー操作のことである。一般的に、[Ctrl]などの修飾キーと文字キーの組み合わせや、修飾キーと[F1]などの機能（ファンクション）キーの組み合わせなどが使われるケースが多い。キーボードショートカットと呼ばれることもある。

このショートカットキーは、Web上や雑誌上の記事において定期的に取り上げられ、“便利な機能”だと紹介される。確かに便利な機能であることは間違いない。しかし、その便利な機能がユーザーの基本的な知識ではなく、一歩先を行くための機能として扱われるのはなぜなのだろう。

本稿では、日本において、ショートカットキーが“便利な機能”であると解釈されるゆえんについて調査し、考察していく。

2. ショートカットキーが割り付けられる機能とは

ショートカットキーが割り付けられる機能は、頻繁に使われるものや、マウスに手を持っていく時間を短縮したいものが多い。たとえば、『日経パソコン』2017.8.14号の「キーボード超快適操作ワザ」という特集記事では、次のような記述がある。

メニューを開かないと実行できないような処理でも、キー操作だけで即実行できる。ショートカットキーの大半は、キーボード左下などにある[Ctrl]キーや[Alt]キー、窓マークが入った[Windows]キーを併用して入力する。（中略）定番のものを覚えるだけでも作業効率は格段に上がる。（『日経パソコン』2017.8.14：22）

ここで紹介されている定番のキー操作には、次のようなものがある。

表 1 [Ctrl] [Alt] [Windows] の活用例 (一部) ¹⁾

[Ctrl] +	[A]	全て選択
	[C]	コピー
	[V]	貼り付け
	[X]	切り取り
	[Y]	繰り返し
	[Z]	元に戻す
[Alt] +	[Enter]	選択した対象のプロパティを表示
	[F4]	プログラムの終了
	[Print Screen]	選択したウインドウをキャプチャー

出典：『日経パソコン』2017.8.14 号 p.22 より筆者作成

たとえば、Microsoft Word を使って文書を作成している際、マウスによるドラッグ操作ですべての文字を選択しようと思うと、その文書の文字数が多ければ多いほど縦スクロールに時間がかかる。マウスポインタを画面の左側において素早く 3 回クリックすればこの操作は適うが、知らない場合は面倒な縦スクロールによるドラッグ操作を強いられるかもしれない。一方、表 1 で示している“[Ctrl] キーを押しながら [A] のキーを押下する”というショートカットキーの操作を知っていれば、ワンタッチでたちまちこの機能の実行を適えることができる。ショートカットキーは、こういった“一般的によく使われる機能”を、キー操作の組み合わせによってワンタッチで実行することができるものになっているため、“便利な機能”だと認識されるのである。

では、ショートカットキーの操作はなぜマウス操作での機能実行の上位に位置付けられ、“便利な機能”だと認識されるようになったのであろうか。本稿では、このことを歴史的経緯と共に見ていきたい。

3. ショートカットキーの起源－日本語ワープロの機能キー

その起源は、1980 年代のワープロにある。

日本語ワープロが初めて発売されたのは 1979 年のことであったが、1980 年代に普及していった中で一般的に存在したのが、図 1 のようなキーボードであった。



図1 富士通 OASYS100 GX に搭載されていたキーボード
(出典:富士通 OASYS100 GX カタログ <http://ykanda.jp> より)

図1を見て分かるのは、左下に配置されている文字入力用のキーの他に、上部ならびに右上部分に多くの機能キーが並んでいることである。2020年代に標準的に使われているPCのキーボードでは上部に[F1][F2]のような刻印のキーが並ぶことが多いが、このキーボードでは左上端から[終了][横拡大文字][行端変更][左端設定][右端設定][タブ設定][漢字辞書][単語抹消][単語登録][移動][複写][前頁][頁指定][次頁][罫線通過][行間設定][4/3 拡大]の順で並んでいた。さらに、[前頁][頁指定][次頁]の下には[前行][文末][次行][削除][センタリング][挿入]の各キーがあり、さらにその下に[↑][←][→][↓]のカーソルキーがあって、その下に[実行]キーが置かれている。[罫線通過][行間設定][4/3 拡大]の下にも[図形表示][枠あけ][線画][グラフ作成]の各キーがあり、その下にテンキーが置かれていた。さらには、各機能キーの側面にも別途機能が割り当てられていて、キーボード左下に配置されている[拡張機能]キーと共に押下することで機能が使えるように設計されている。

こういったキーについて、紀田順一郎(1985)は次のように述べていた。

わが国のキーボードはやたらにファンクション・キーが多いために、ブラインド・タッチが困難である。(中略)第一、ボード自体、幅が広過ぎて両手の指がカバーしきれない。はっきり言えば、ブラインド・タッチを全く考えていないレイアウトなのである。むろん、こうしたレイアウトは各メーカーごとにちがっていて、かりにA社のキーボードに習熟しても、B社ではほとんど通用しないために、ブラインド・タッチを覚えたとしても、汎用的な効果はないのである。

メーカーは日本人ユーザーがキーボードに習熟していない現状に合わせ、ファンクション・キーという名の、「説明付きのキー」を滅多矢鱈に増やしてしまったのである*。
(紀田 1985 : 36-37)

* 引用文内における「・」の表記は、原文ママである。本文との間で表記が統一されないことをご了解いただきたい。

機能キーの数が多く、かつ、配置がまちまちであることから、手元を見ずに操作することが困難だという指摘である。

また紀田は、1987年に出版された『ワープロ考現学』における古瀬幸広との対談で、日本のワープロにおける機能キーの違いについて次のようなやり取りをしている。

古瀬：パソコンにおけるワープロを普及させたのはね、アメリカじゃやっぱり『WordStar』ですね。

紀田：コントロール・キープラス一文字で、ファンクション・キーになるという発想など、ブラインドタッチを前提としたものだから、当初日本人には考え付かなかったことだと思いますね。一方日本人は、指を右へ迷い左へ迷わすということになりがちな、プッシュボタン方式を作ったと思うんです。印を付けたボタンを押せば、ワンタッチでこと足りるというのも、確かにひとつの発想ではあるんですが[†]。(荻野・紀田・古瀬・三田 1987: 22)

このやりとりは、カーソルを上下左右に移動させるためのキーとして矢印キー（カーソルキー）を配置していることに対する意味合いも込められている。1980年代当時、米国ではそれ以前からタイプライター文化が定着していて、キーボードのタッチタイピングをこなせる人が多く存在した一方で、日本人はキーボード操作に習熟している人が少数であったことから、米国製のソフトウェアで使われるようなファンクションキーと文字キーの組み合わせによる機能²⁾を用意しても利用者がなびかないため、キートップに機能の名称を表示したものが乱立するという指摘である。

米国でのタイプ事情については、山田尚勇（2014）に詳しい。それによると、米国では1800年代からタイプライターが存在していて、早くも1930年代には幼稚園から大学までの教育現場において技能習得の最適年齢が考究されていたため、古くから多くの人がキーボード操作に馴染む土壌があったのだという（山田 2014: 96）。しかし日本ではこの経験が存在しなかったため、いきなり目の前にワープロのキーボードが現れても多くの人がこれに対応できず、キーボード・アレルギーを発症していると表現されていたことが背景にある。

もちろん、日本語ワープロが誕生してまだ10年も経たない時期であったことから、メーカーもなるべく利用者にとって分かりやすいものをリリースしようとしていたのであろう。見た目に分かりやすいということだけでなく、表^{おもて}から見えるところ、探せばわかるところに機能を示すことが重要であると解釈されていたからこそ、図1のようなキーの配置になったのだと考えられる。

[†] 引用文内における「・」の表記は、原文ママである。本文との間で表記が統一されないことをご了解いただきたい。

4. PC が使われるようになってから

見た目に分かりやすい配置は、やがて、1990 年代に入ってから文書処理の作業に PC 上のワープロソフトが使われるようになっても継続されていた。[F1] [F2] のようなファンクションキーにどの機能が割り当てられているかを示すテンプレートが存在したからである（図 2）。



図 2 NEC 98note にて使われていた一太郎のテンプレート
（出典：『日経パソコン』1991.06.24 号 p.223）

さらに、1990 年代中頃になって、Windows など Graphical User Interface (GUI) の OS が使われるようになると、アプリケーションソフトの起動など基本的な命令操作がキーボードからマウスへと移ることになる。アプリケーションソフト上での操作も画面上にアイコンが並び、見た目に分かりやすく、かつ、機能の実行にキーボードを操作しなくて済む状況が誕生する。これは、キーボードに習熟できてない日本人にとっては、願ってもない環境であった。文字ではなく絵で表現されていることも歓迎された。たとえば「切り取り」であればハサミの形のボタン、「保存」であればフロッピーディスクの形のボタンを押せばよかったからである（図 3）。

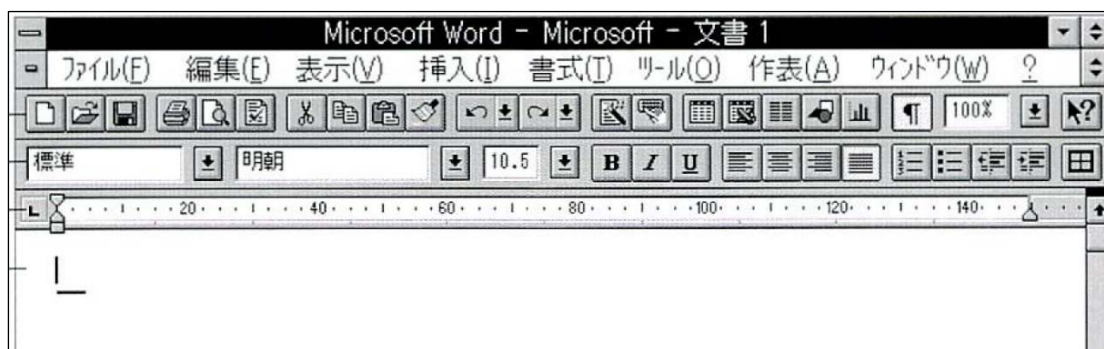


図 3 Microsoft Word6.0 の画面の様子
（出典：MICROSOFT WORD for Windows® Version 6.0 セミナーテキスト初級編 p.6）

こうして、元々キーボードに馴染んでいなかった人々が、マウス操作によって PC のアプリケーションソフトを使える時代がやってきたのと同時に、ますますショートカットキ

一の存在からは離れていくことになり、一般的に使われる環境からは遠くなる。つまり、キーボード操作に習熟しない限りマウスによる操作が第一関門になるとすれば、ショートカットキーによる操作はその上位に位置付けられることとなる。

5. 英単語由来のキー割り当てとその影響

もう一つ見逃せないことが、ショートカットキーの操作に割り当てられた文字の持つ意味である。

先の表1で示したショートカットキーの例では、[Ctrl] + [A]で「全て選択」が実行できるとされていたが、この[A]は、「全て」を表す英単語である“All”に由来していると考えられる。同じく、[C]で「コピー」となっているが、これも“Copy”に由来しているであろう。[X]は、はさみ(✂)の形状を表している。他にも、[Ctrl] + [O]で「開く」のメニューが表示されるが、この[O]は“Open”に由来しているであろうし、[Ctrl] + [P]で「印刷」のメニューが表示されるが、この[P]は“Print”に由来していると考えられる。つまり、英単語由来の割り当てが多いということである。

ところが、日本語ワープロの初期の頃は、キートップに刻印されていたカナ文字での入力をして漢字に変換する方法が取られていた。1979年に東芝が初めて発売したJW-10はカナ文字での入力からの漢字変換、翌年に富士通から発売されたOASYS 100で採用された親指シフトキーボード(図4)でもかな文字での入力からの漢字変換が使われていた。



図4 親指シフトキーボード(出典:富士通 OASYS100 カタログ <http://ykanda.jp> より)

ローマ字入力が日本語ワープロに初めて採用されたのは、1980年12月にキヤノンが発売したキヤノワード55で、採用の理由は「英文タイプに慣れた人が使いやすいように」というものであった(『朝日新聞』1980.10.01 東京朝刊:8)。こうなると、ショートカットキーの割り当て自体が困難になる。そもそも、現在のPCのように、[Ctrl]キーが最下段に位置することが標準化されていなかったばかりでなく、キーそのものの文字種も配列も多岐に渡っていたのでは、確実に割り当てることができなかったからである。

キー配列は、この後さらに変化していく。1984 年～1987 年頃には、各メーカーが初心者を取り込むことを目的とした五十音配列キーボードが現れ始める（図 5、図 6）。こうなると、ますます割り当ては困難になる。仮に“Open”に由来して [O] に「開く」を割り当てたとしても、利用者は五十音を元にキー操作をしていたからには [O] を目当てにキーを叩いていなかったであろうし、図 5 のようなキーボードではインターフェースも独自であったためである。



図 5 キヤノン PW-10J のキーボード(撮影:筆者)



図 6 ブラザー スーパーピコワードのキーボード(撮影:筆者)

こういった五十音配列キーボードは、1980 年代終盤には徐々に消滅していき、1990 年代に入ると QWERTY 配列にてローマ字入力を利用する人が増えていった。しかし、それはキヤノンが当初考えていた「英文タイプに慣れた人が使いやすい」という意味ではなく、利用者が「ローマ字であれば覚える、そして使うキーの数が少なくて済む」と考えた結果であった。

その際、日本語入力を習得することを第一義に考えるならば、[O] のキーは [O] ではなく、あくまでも「お」として認識される。同じく、[A] のキーは「あ」として認識される。こういった認識では、英単語由来のショートカットキーは意味をなさないものになっ

てしまう。加えて、英語をはじめとする欧米の言葉に馴染みがないければ意味の理解が進まないため、習熟するのに困難が伴ってしまう。

6. なぜ“便利な機能”だと解釈されるのか

ここまで見てきたように、日本におけるキーボードでの文字入力とは約 40 年の歴史があるが、最初の 10 年間には種々の配列が乱立したことや入力文字種も落ち着いていなかったことから、ショートカットキーが定着するだけの土壌が出来あがっていなかった。また、そもそもキーボードに対して多くの国民が慣れていない状況からのスタートであったこともあり、マウス操作への期待感が非常に強く、GUI 環境が登場した 1990 年代中頃からは、マウス操作が多用される状況にもあった。

しかし、キー操作による機能の実行は、機能を使うための時間を確実に短縮してくれる。PC 操作に少し慣れた人が、マウス操作では時間がかかる機能の実行に対して、ショートカットキーを使うと時間が短縮できることを実感することから、“便利な機能”だと解釈されることになるのであろう。

7. おわりに

ショートカットキーが“便利な機能”として認識されることは、悪いことではないのかも知れない。しかし、もっと多くの人に快適に利用されるようになるためには、メーカーや OS によらない共通の割り当てを確立した上で、早いタイミングから使って行けるように指導されることが重要ではないだろうか。その際、キーの割り付けが英単語由来になることを想定するならば、英語など欧米の言語に馴染んでおくことも重要になる。コンピューターが元々英語圏発祥のものであることを考えれば、なおさらである。

註

- 1) これらのキー操作は Windows PC 向けのショートカットキーだが、上の 6 項目については、[Ctrl] を [Command] に置き換えれば Mac でも同様に操作できる。
- 2) ダイヤモンドカーソルと呼ばれる機能である。

参考文献

- 荻野綱男・紀田順一郎・古瀬幸広・三田誠広, 1987, 『ワープロ考現学』日本ソフトバンク.
 神田泰典, 2009, 「オアシスのホームページ」, 神田泰典氏個人ウェブサイト, (2021 年 2 月 19 日取得, <http://ykanda.jp/>).
 紀田順一郎, 1985, 『ワープロ書斎生活術』双葉社.
 山田尚勇, 2014, 『文字入力とテクノロジー』くろしお出版.